

幸	を	見	す	農
せ		え	る	業
		る		ビ
		化		ジ
				ネ
				ス
	V	O	L	19

経営者団体に加入してみよう

前号の「家庭教師を使ってみよう」が経営を、楽にする。テクニックだとすれば、今回のお題目は経営を、もっと楽しくする。チャンスだととらえていただきたい。

私は日々、「仕事がこんなに楽しくていいのか」と感じながら経営をしている。知り合いのオーナー経営者たちも、「世の中に中小企業の経営ほど面白い仕事はない」と口々に語る。

✓1000万人超の経営者同志

我われ中小事業者の経営者の醍醐味は何と言っても、無から有を自由に創造できることだ。規模は小さくとも、ヒト・モノ・カネ・情報といった経営資源を駆使して、世の中に役立つモノやサービスを一つひとつ具現化していける最高のポジションにある。大企業と同じ経営者でも様々な制約もあるだろうし、雇

われ社長ならなおさらそうだろう。

日本には約430万社の中小企業があり、商店、飲食店、開業医など個人事業主が約600万人いる。つまり、中小零細事業者の経営者が1000万人以上いる。農家・農業法人もその一部だ。

こうした1000万人もの経営者がたくさんの失敗、成功を繰り返しながら、ありとあらゆる分野で社会に貢献している。1000万人の経営者は千差万別だが、ひとつだけ共通することがある。「経営をよくしたい」と考えている点だ。少なくとも「もっとよくなればいいな」とは願っているはずだし、どれだけネガティブな人でも「もっと悪くなりたくない」と思っている人は皆無だろう。当たり前のように聞かせるが、これはとても重要な事実だ。世の中を見渡せば、この共通点を持つオーナー経営者の仲間達が無数にいるということだ。そして、「経営をよくしたい」

という同じ志を持つ経営者が集う団体も、全国に無数にある。

私自身、家業がある程度まで成長させた後、ある種の達成感とひきかえに、経営の方向性が見えずに悩んだことがあった。今から考えれば、経営を、大きくすることには必死だったが、よくするために何をすべきか視界が不明瞭になっていたのだ。そんな時期に、同じ農業法人の経営者に勧められて入会したのが「中小企業家同友会」(以下、同友会)だ。

2007年に入会し、最初に参加したのが経営指針セミナーだった。経営者の仲間たちと一緒に、経営指針の成文化に取り組んだ。いま振り返れば、家業から企業への転換をしなければならなかったその時期に、何百時間もかけて作った経営指針書はまさに私の羅針盤となり、同友会で巡り合った経営者の先輩たちは私の道標を示してくださった。

ほかにもいろいろな経営者の会があるが、同友会は私の性に合っていた。会の目的は「よい会社、よい経営者、よい経営環境」と実にシンプルですばらしい。そのために考え方として、「社員と共に育つ社風づくり」を掲げている。「社員と共に社員の力をもっと引き出したい」「社員との信頼関係を築きたい」などの課題を経営者同士が共に考え、解決していく場でもある。じつに謙虚で素晴らしい。

あらゆる活動について参加も自由。異業種交流会につきものの変な勧誘なども一切ない。サラリーマンもおらず、みな向上心を持った経営者だからそんなせいこい考えは初っ端からない。経営者としての悩みを話しあえる場だ。「社内や取引先には出しにくいものだが、経営者同士の学びあい、交流の中でお互いに成長していくことができる」場でもある。何よりも同友会の活動の要は、先



南さかうえ代表取締役。1968年鹿児島県生まれ。24歳で就農。コンビニおでん用ダイコンの契約栽培拡大を通して、98年から生産工程・投資・予算管理の「見える化」に着手。これを進化させたIT活用による工程管理システム開発に数千万円単位で投資し続けている。現在、150haの作付面積で、青汁用ケール、ポテトチップ用ジャガイモ、焼耐用サツマイモなどを生産、提携メーカーへ全量出荷する。「契約数量・品質・納期は完全100%遵守」がポリシー。03年、500馬力のコーンハーベスタ購入に自己資金3000万円を投下し、トウモロコシ事業に参入。コーンサイレーズ製造販売とデントコーン受託生産管理を組み合わせた畜産ソリューションを日本で初めて事業化。売上高1億6000万円。08年から食品加工事業に進出。剣道7段。

坂上隆
Takashi Sakau

にも述べた「経営指針書作り」の活動だ。

経営指針書の重要性はいくら強調しても強調しすぎることはない。農家・農業法人をはじめ中小事業者の共通した悩みは、中長期の経営展望が存在しないことに起因する。これではあなたの農場は、レールを敷かないまま、どこかわからない駅に向かって突き進んでいる列車と同じである。揺るぎない理念を決め、正しい方針を定め、しっかり計画を立てる——経営指針によって、レールが固まり、向うべき駅が明らかになる。どんな時代がやってこようが、指針書があれば不安はない。時代の変

化でレールにヒビが入りそうであれば、修繕すればいい。新たな課題はいつもやってくる。指針書は毎年改定していけばいくほど、磨きがかかる。そうすると自然に、信頼できるパートナーもやってくるようになる。

これだけのことで、仕事が充実しどんどん楽しくなるのだから、不思議なものだ。

✓全国に経営者仲間

おそらく農家・農業法人のほとんどは経営指針書を作ったことはないだろう。今は訳知り顔で語る私だっ

て数年前はそうだったし、日本に1000万人いる中小事業者の大半もそうだ。みんなそんなものだから今ないことを気にすることは無い。

あとは作るか作らないかを、経営者が決めることだ。ひとつだけ確実に言えることは、経営者に指針がないと、社員が何も見えない暗闇にいる状態だということだ。「さかうえ」では指針書が何をすべきか、何を求められているかを社員に伝え、社員が自ら考えて行動する基準になっている。私自身、社員教育の考え方にブレが生じたり、事業の方向性に悩むときは必ず読み返す。

ひとりで指針書を黙々と作れとい

っても大変だ。そのきっかけ作りのためだけにでも、同友会の活動に参加することを勧めたい。

ほかに加入している経営者の団体は、地元の商工会、産業支援センターのほか、同業者が集う鹿児島県の農業経営クラブ、全国の農業法人協会だ。最近、理事として参画した「日本食農連携機構」もある。

全国に経営者の仲間を持てることは、何と楽しいことか。